詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

星空へ手締めたびたび酉の市
羽生市　岡村　実

〈評〉空気が冷えてきて星がくっきり見える頃、地上ではとりの市のきらめきとざわめき。天地の光と音の対比が効果的な句。

隠れんぼ団栗踏んで見つかりぬ
川崎市　久保田秀司

〈評〉気配に敏感な鬼は、こんなささいな音も聞き逃さない。季節感あふれる子どもの情景。

隆々の葉に誘はれてだいこ買ふ
桐生市　中村　正人

絵の中の人のごとくに赤マフラー
東　京　髙木　靖之

西空に宵の明星一葉忌
大阪市　土居　わ子

綿虫に母の編棒ふと止まり
東　京　山口　治子

大原を墨絵のごとく夕時雨
東久留米市　矢作　輝

靴先に触れて崩るる苔かな
横浜市　相沢恵美子

ニコライへゆるき坂道落葉踏む
東　京　徳原　伸吉

片方の草履ぶらさげ七五三
春日市　林田　久子

井上　康明　選

ぎしぎしと重き白菜割りひらく
平塚市　高橋　佳代

〈評〉ずっしりと重い白菜の手応えが伝わってくる。薄緑の葉が何枚も重なっている白菜を、大きな包丁で割るように切る。

堆き練炭の灰石鼎忌
小平市　中澤　清

〈評〉俳人・原石鼎の忌日は12月20日。うずたかい灰に句と人をしのぶ。吉野在住の数年を連想した。

今日からは竹刀一本寒稽古
宇都宮市　手塚　康雄

水澄んで水のいのちの衰ふる
福岡市　三十田　燦

太陽は真上にありて山粧ふ
唐津市　梶山　守

山影を背負ひて冬田暮れにけり
狭山市　小俣　敦美

石蕗の花遍路の鈴の遠くあり
久留米市　持地　恒美

北からの風の尖りて冬が来る
津　市　秋山　歩荷

ざわざわと風渡りゆく枯野道
奈　良　高尾山　昭

セーターの毛玉気にせり古書店主
相模原市　はやし　央

片山由美子　選

食べ頃となる干し柿にさす朝日
鹿児島市　平川　玲子

〈評〉柔らかさと甘さが増してきた干し柿は、日を浴びて朱色に輝いていることだろう。朝日に焦点を合わせたところがポイント。

日向ぼこ眠るつもりはなかりしに
甲府市　村田　一広

〈評〉気がつくとうつらうつらしている、その気持ちよさこそが「日向ぼこ」のありがたさだろう。

お早うの声たからかに今朝の冬
札幌市　清水　志

日陰から秋が去りゆく心地して
大阪市　福永　都女

タクシーの列の伸びゆく冬の雨
東　京　野上　卓

くつくつと煮ゆるボルシチ虎落笛
名古屋市　可知　豊親

飼育小屋に藁敷き詰めて冬用意
和歌山　浦　貴子

土曜日の父兄参観小六月
福　岡　手島喜美江

数へ日の病室帰宅許可を待つ
千葉市　畠山さとし

寒の水五体を走るあしたかな
加古川市　中村　立身

小川　軽舟　選

立冬の富士青々と西にあり
平塚市　小林　耕平

〈評〉地球温暖化の影響か、今年の富士山の初冠雪は観測史上最も遅かった。いぶかしみつつ青々とした立冬の富士を望む。

抜け道を猫に教わる小春かな
宝塚市　石川　裕子

〈評〉猫について行ったら思わぬ場所に出られた。小春日和にもうけものをした気分だ。

星の入東風光秀の五輪塔
紀の川市　中島　走吟

コンビニの夜眩しくておでん買ふ
東久留米市　矢作　輝

軽トラのラジオに秋の天皇賞
藤沢市　武　正義

晩秋の空に一本のポプラ
札幌市　佐藤　学

ささくれの目立つ濡れ縁冬隣
香芝市　河野　嘉雄

自然薯掘るさらに頭を突つ込んで
飯塚市　倉田　幸男

人はまだ戦に懲りず寒灸
安中市　佐藤　志乃

聞く耳を持たぬ女の秋扇
横浜市　荒木　久子

ことばの五感

応人生相談

川野里子

・バス停の看板が少し曲がりをり行き先がねぢ曲がることあり　目黒哲朗
（歌集『生きる力』）

商店街の十字路にバス停があり、その前に薬局があった。不思議な薬局で、開いているのを見たことがないのだ。ただ、1カ所だけシャッターのない窓から製薬会社のマスコットのカエルの人形が見えていて、それが気になっていた。「応人生相談」と書かれた札を首からぶら下げていたからだ。この薬局は心を癒やすのか？時にはだれかがひっそりここに通うのか？とも思ってみたが、この薬局にこそ治療が必要な気がしてくる。

夕方、薬局の前で数人がバスを降りる。「応人生相談」のカエルの前を通り、迷うことなくそれぞれの方向に別れてゆく。薬局は気づかないほど微かに黒ずみつつあり、モルタルに罅が入り、プラスチックのカエルも色あせながら立ち続けていた。だが、やはり薬局ではあって、バス停は何となく「薬局前」と呼ばれていた。

そんなある日、ふと違和感があって薬局の窓を見ると、カエルの首から「応人生相談」の札が消えていた。ここは誰かにひっそり管理されていたのだ。そしてその人はついに人生相談を諦めたのだ。とたんに色あせたカエルはプラスチックごみにしか見えなくなり、建物は廃虚に見えてきた。そして間もなく更地になった。

しかし、今もバス停はなぜか「薬局前」と呼ばれている。降車した人々が迷わぬようそれぞれの帰路へと振り分けているからだろうか。

（かわの・さとこ＝歌人）